巻頭言

新たな未来を切り拓け

IMF-JC 事務局長
若　松　英　幸

シドニーから西に約300キロ、ブッシュに覆われた砂漠地帯にカウラという街がある。第二次世界大戦中捕虜として収容されていた日本人1,100名強が、自殺行為とも見られる脱走を試み、231名が死亡したと言われる。この地にカウラの人々が日本人戦没者霊園を作り、桜並木や日本庭園を造成、丁寧に弔ってくれていることを、多くの日本人は知らない。新聞でこの事実を知り、1988年7月に当時役員をしていた支部の海外交流行事でシドニーを訪問した際に、参加者や組合員から募金を集め、責任者のドン・キブラー（Don KIBBLER）氏に桜並木基金として15万円を手渡した。その後、1996年7月にもさらに募金を集めて64万円をキブラー氏に渡し、桜の植樹とその後のメンテナンス資金の一助とした。いまも桜の木の根元には、地元の子供たちの名前と寄贈者の名前が刻まれたプレートが埋め込まれている。

そんな想い出深いオーストラリアを、AWU（オーストラリア労働組合）の125周年記念大会に招待されて今年の2月に訪問した。会場のゴールドコーストに向かう途中の機内から見た、世界一を誇るサンゴ礁、グレートバリアリーフの美しい海岸地帯は、大洪水のため一帯が黒い土で覆われていた。日本の21倍という広大なオーストラリアは、昨年、西部が猛暑、南部が干ばつ、メルボルンなどの東南部が寒波、そして東北部のクイーンズランド州が大洪水というように、異常気象による災害が頻発した。AWUの地域事務所も洪水で被害を被っており、日本からわずかではあったが見舞金を持参し、大会挨拶の席上でポール・ハウズ書記長に手渡した。AWUの皆さんは復興基金を設立していたこともあり、非常に喜んで下さり、レストランやエレベーター、ロビーなど、至る所で多くの代議員から握手を求められた。彼らは、ギラード豪首相やブライ州首相がスピーチする際は自然に立ち上がり、拍手で迎え、まさにスタンディング・オベーションで感謝の念を表していた。その心のこもった振る舞いに、真のジェントルマン、日本の武士道にも通じる気質を垣間見、カウラの人々の優しさも思い起こされた。

それから1カ月後、日本を観測史上最大のマグニチュード9.0の地震が襲うことなど、誰が想像し得ただろうか。巨大な津波が500㎞におよぶ東日本沿岸を廃墟とし、加えて福島第1原発の事故、まさに未曽有の惨事となった。金属労協の組織内でも、これまでに判明しているだけで30名以上の尊い組合員の命が奪われ、ご家族も含め行方不明の方も多い。工場の被災と計画停電により、素材や部品の供給不足が深刻化、全国的規模で工場の操業がストップし、日本のみならず世界中のものづくり現場で大混乱を巻き起こしている。

震災直後から、世界中の仲間によるお見舞いや励ましのメッセージが相次ぎ、また多額の連帯支援金の送金が続いている。加盟各産別も、現状把握と被災者救援に全力を注いでおり、組合員による大規模なボランティア活動を展開している。

日本は「失われた10年」と言われた1990年代以降、長引く閉塞感の中であえいできた。リーマンショック以降の不況を何とか乗り越え、経済が順調に回復しようという矢先の大震災勃発である。大きな壁がまた我々の前に立ちはだかった。私たちは、被災者救援、被災地の復旧・復興と、大きな試練に立ち向かっていかなくてはならない。金属産業は、生活支援やインフラ整備、新たな町づくりに重要な役割を果たすべき産業であり、従来から培ってきたものづくりの創意工夫、チームワークを今こそ発揮すべき時である。

日本は先進国中最悪の少子高齢化と財政赤字を抱えているのに加え、グローバルな金融危機も完治せず、円高、資源、食料といった懸念材料が山積している。われわれは世界の仲間から寄せられた連帯の絆を糧に、これまで幾多の困難を乗り越えて来た知恵と経験を生かし、ものづくりの力を突破口として日本の再生を果たし、新たな未来を切り拓いていかなくてはならない。

ハウズ書記長（左）に見舞金を手渡す

AWU125周年大会ゴールドコーストにて